

[海外研究・教育活動]

フィールドワークの面白さってなんだろう

新潟医療福祉大学 健康栄養学科 村山伸子

1. これまでのフィールドワーク

20歳代半ばに単身タイに渡り、その後、トンガ王国、フィリピン、タイ、バングラデシュ、ラオスと、アジアや南太平洋の国々で、フィールドワークを続けてきた。あらためて数えると、すでに25年にもなっている。この中でも、私がフィールド研究者としての大変さと醍醐味を感じたのは、博士課程の研究のために、東北タイの農村で1年間生活しながら村人の生活を追いかけていたときであった。雨季には村人は、集落から出て水田の脇で生活するため、調査のために朝5時頃に暗い中を数キロ歩いて彼らのもとに行かなくてはならない。しかも、洪水で見えない水田の畦道をさぐりながら、体重計を頭にのせてである。転んだら体重計は壊れる、そして調査はできなくなる。また、稲刈りの季節には、干上がった水田に入るやいなや蟻が集団でズボンの裾から入ってきて、無数の蟻に足全体を噛まれる。痛いなんてものではない。そんな1年間の調査が全て終わった日、水田の水平線に沈む夕日が今まで見たこともないほど真っ赤で大きくゆれていたことを今でも忘れられない。

2. フィールドワークの何に惹かれるのか？

1つめは、「研究」としての面白さである。どうしたら人間は自然と共生しながら豊かに持続的に生きることができるのか？この問いの答えはフィールドの中にあるのだと思う。私たちは、未だ自然や人間についてわかっていないことのほうが多いのだと思うが、豊かさや持続性の一つのヒントは自然と人間の関係の「多様性」にあるのではないかと考えている。その手がかりをさぐるため、現在「昆虫食」について地理学者との共同研究をしている。

2つめは、「自分が相対化できることで、自分の限界が広がる」ことの面白さである。

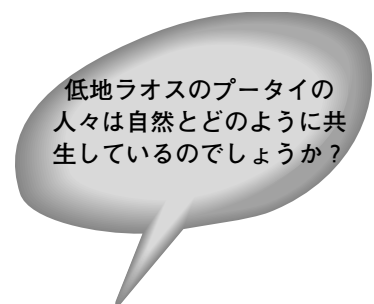
3つめは、フィールドならではの「仲間」ができることである。私たちの調査には多くの現地スタッフがかかわっている。多くの場合、村人をトレーニングして調査員になってもらう。そして、フィールドで現地や日本の仲間と飲むお酒はうまい。まだまだフィールドワークの魅力語りつくせていないが、写真で現在調査をおこなっているラオスの様子から彼らの生活の豊かさや可能性を感じてもらえたらと思う。



川の中に魚のしかけをする



焼き畑後の休閑7年目の森での虫取り



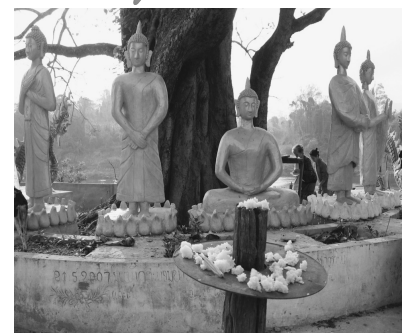
低地ラオスのプータイの人々は自然とどのように共生しているのでしょうか？



田や森で採った昆虫を薪で調理



もち米から焼酎を蒸留中



川のそばに仏像を祭り、もち米飯のお供えをする